（二〇一六年度）

8 国語問題（九〇分）

（この問題冊子は17ページ、三問である。）

受験についての注意

一、試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開いてはならない。
二、試験開始前に、試験監督者から指示があったら、解答用紙の右上の番号が自分の受験番号と一致することを確認し、所定の欄に氏名を記入すること。次に、解答用紙の右側のミシン目にそって、きれいに折り曲げてから、受験番号と氏名が書かれた切片を切り離し、机上に置くこと。
三、試験監督者から試験開始の指示があったら、この問題冊子が、右に記したページ数どおりそろっていることを確かめること。
四、筆記具は、**HかFかHBの黒鉛筆またはシャープペンシル**に限る。万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能やスマートウォッチなどのウェアラブル端末を使用してはならない。
五、**マーク式の解答は、解答用紙の各問の選択肢の中から正解と思うものを選んで、そのマーク欄をぬりつぶすこと。**
六、マークをするとき、マーク欄からはみ出したり、白い部分を残したり、文字や番号、○や×をつけたりしてはならない。
また、マーク箇所以外の部分には何も書いてはならない。
七、**記述式の解答は、各解答欄にていねいに記入すること。**
八、訂正する場合は、消しゴムでていねいに消すこと。**消しくずはきれいに取り除くこと。**
九、解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
十、試験監督者の許可なく試験時間中に退場してはならない。
十一、解答用紙を持ち帰ってはならない。
十二、問題冊子は必ず持ち帰ること。

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

私たちは、よくこんなことを経験する。たとえば、ひとりで森のなかをぼんやり歩いている。そのうち、ふと視界が開け、一本の木立の向うに山の尾根が見える。そんなとき、私たちは、まえにもここへ来たことがある、そして、この地点から、このままの風景を見たことがある、季節も時刻もまったく同じだ、のみならず、それを眺める自分の気持も、そんな思いをすることがある。あるいは、だれか友だちと話している。その、ある一瞬の相手の表情やしぐさを見て、まえにもこんなことがあったと思う。周囲の家具ちょうどはもとより、その場の条件も、相手と自分との関係も、すべて同じだと思うのだ。だが、それらの経験は、どう記憶の糸をたぐっても憶いだせない。いや、じじつ、それははじめての経験なのだ。

だれにもあるこういう経験を、私は、次のように解釈する。[1]おそらく、それは意識の弛緩状態に起る現象ではなかろうか。視覚のとらえた映像は、最初、弛緩した意識によって見のがされ、無意識の領域にしまいこまれる。そして、それが完全に無意識の底部にもぐりこんでしまわぬうちに、ほんの一瞬おくれてやってきた意識が、その尻尾をつかまえて明るみに引きずりだす。その瞬間、無意識と意識とが出あい、私たちは、「ああ、まえにも同じことが」と思うのではないだろうか。

[2]このとき、私たちは、まざまざと「ものを見た」という感じにおそわれる。木立や尾根が、友だちの肉体が、いや、それらを眺める自分をも含めて、あらゆる対象が、このときほど明確に、外にある対象として存在するときはない。自分の意識だけが、自分の肉体からそっと足をぬいて、下界を見おろしているような感じに捉えられる。自分は純粋に意識だけになる。純粋な意識者としての快感を味わう。[3]こういう純粋な意識の前では、時間は消滅する。意識は、平面を横ばいする歴史というものに垂直に交わるからだ。

[4]だが、このばあいに私が純粋な意識と呼んだものは、あくまで消極的なものである。一瞬前のたいまんを前提として、その遅れをとりもどそうとする緊張感にすぎない。それは快癒期の患者が知る健康感と似ている。純粋な意識の真の緊張感を呼び起すもの、それが私のいう演戯である。

自分を他人に見せるための演技ではない。自分が自他を明確に見るための演戯である。こまが完全に回転しているとき、それは静止の状態を呈する。が、やがて力が衰え、ぐらつきだし、ついに倒れる。この運動をフィルムに写し、逆に映写してみればいい。こまは、はじめ地上をのたうちまわり、なんとかして立ちあがろうと努める。やがて円盤が地上を離れる。そして最後に、心棒は地上に垂直に立ち、静止状態に至る。それとおなじように、[I]私たちの意識は、平面を横ばいする歴史的現実の日常性から、その無際限な平板さから、起きあがろうとして、たえずあがいている。そのための行為が演戯である。それはなにも私小説作法の原理ではない。ひとは、生きていくうえに、それを必要としている。そして、多かれ少かれ、意識するとしないとにかかわらず、だれもが[C]へいぜいそれをおこなっている。

演戯によって、ひとは日常性を拒絶する。日常的な現実は私たちを自分の平面に引き倒そうとして、つねに寝わざをしかけてくるからだ。私たちはそれに負けまいとする。あくまで地上に、しゃんと立っていようとする。そのための現実拒否なのだが、それは現実からの逃避ではない。逃避したのでは、私たちは現実のうえには立てない。現実を足場とし材料として、それを最大限に利用しなければならぬのだ。現実と交わるというのは、そういうことである。私たちの意識は、現実に足をさらわれぬように、たえず緊張していなければならぬと同時に、さらに、それを突き放して立ちあがれる[5]「特権的状態」の到来を、つねに待ち設けていなければならない。

厳しい意識者にとっては、もちろん、自己すらも、自己の性格や感覚さえも、自己確立のための足場として利用しうる現実なのである。「嘔吐」のなかの女は、腿の肉を傷つけるいらくさを、そしてその痛みの感覚を、頑強に認めようとしなかった。こういう人間にとって、演戯は、心理的領域に属する虚栄心ではなく、はなはだ倫理的なストイシズムに道を通じている。

自己が他人を、いや自分自身をも、明確に見るための演戯と、私はいった。が、見るというのは、たんなる認識でも観察でもなく、見たものを同時に味わうことにほかならぬ。すでに劇の進行について語ったように、意識は先走りしてはならぬのだ。役者は劇の幕切まで自分のものにしていながら、その過程の瞬間瞬間においては、そのつど未知の世界に面していなければならぬ。先走りする意識は未来をも見とおす。歴史を諦観し観照する。が、[6]認識者の意識は現実と交叉しない。現実から完

全に遊離してしまう。文字どおり、現実から足を抜いてしまうのだ。そこには演戯の余地はない。

7 演戯者にとっては、未来は、知っていて同時に知らぬものである。そのばあい、現実の日常性の束縛から脱卻(だっきゃく)しているがゆえに、時間は停止してしまう。それは意識が上に伸びあがって、時間の外に脱(ぬ)けだしたからであるが、かれの立っている地盤はあくまで現実である。上に脱け出た意識は、足下の現実が時々刻々に動いていることを実感しているはずだ。「特権的状態」をD けいきとして、過去の日常性は消滅し、しかも眼前には未知の未来が横たわっている。演戯者には、すべては見えない。過去と未来とから切り放たれた現在だけが、過去・現在・未来という全体の象徴として存在しているだけだ。前後に暗黒があればこそ、その間の時間を光として感じることができる。その前後には暗黒の淵に埋没してしまえばこそ、その間の一瞬に浮びあがることができるのだ。意識は過去・現在・未来の全体を眺めわたせる地位にありながら、しかも限られた枠のなかだけしか見ようとしないから、その間の時間の経過を強烈に味わうことができるのだ。

たんなる認識者の眼には、時間は消滅し放しである。かれには過去・現在・未来が見えている。が、全体が見えてしまったものに、全体の意識は存在しない。いいかえれば、過去も現在も未来もないのだ。ただ模糊(もこ)たる空間があるだけだ。自分が部分としてとどまっていてこそ、はじめて全体が偲(しの)ばれる。私たちは全体を見ると同時に、部分としての限界を守らなければならない。あるいは、部分を部分として明確にとらえることによって、そのなかに全体を実感しなければならない。

II そういう二重性が、私たちに演戯を要求する。見て、見ぬふりをする。それがストイックたちの智慧(ちえ)であった。が、これはE しょせいじゅつではない。じじつ、見ていて、見えないのだ。全体が見えないということは、部分の特権である。個人の特権である。

今日、私たちは、あまりにも全体を鳥瞰(ちょうかん)しすぎる。いや、全体が見えるという錯覚に甘えすぎている。そして、一方では、個人が社会の部分品になりさがってしまったことに不平をいっている。私たちは全体が見とおせていて、なぜ部分でしかありえないのか。じつは、8 全部が見とおせてしまったからこそ、私たちは部分になりさがってしまったのだ。ひとびとはそのことに気づかない。知識階級の陥っている不幸の源は、すべてそこにある。全体が見とおせた瞬間、全体という観念が消滅す

る。知識も智慧も消失する。そこには、すべてを知るものの無智があるだけだ。

（福田恆存「人間・この劇的なるもの」）

〈注〉「嘔吐」…サルトル（フランスの哲学者、文学者）の小説。

問一　傍線部1について、「意識の弛緩状態に起る現象」とはどういうことを言うのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　映像が朦朧（もうろう）とした意識によって希薄になりかかったのを、明確な意識によって鮮明にされること。

b　映像が無意識の領域に沈み込まないうちに、後続の意識によって把握されること。

c　映像が意識の欠落によって一瞬見逃されそうになったところを、回復した意識がすぐさま捉（とら）え直すこと。

d　映像が無意識の領域に漂っているあいだに、潜在していた意識がその一部を掬（すく）い上げること。

問二　傍線部2のような状態に「私たち」がなるのはなぜか。次の中から適切でないものを一つ選べ。

a　このとき、すべての対象が、見られることを促す存在となっているから。

b　このとき、すべての対象が、対象そのものとして存在しているから。

c　このとき、すべての対象が、見られるためにある存在となっているから。

d　このとき、すべての対象が、意識の外部にある存在となっているから。

問三　傍線部3について、「意識」が「平面を横ばいする歴史というものに垂直に交わる」ことができるのはなぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　自分は純粋な意識者となっているので、歴史という時間の流れを充分に受けとめる能力をもつから。

b　自分は純粋に意識だけになっているので、歴史という時間の証言者の位置を確保しているから。

c　自分は純粋な意識者となっているので、歴史という時間の流れをせき止める力をもつから。

d　自分は純粋に意識だけになっているので、歴史という時間を俯瞰する存在となっているから。

問四　傍線部4について、「私」が「純粋な意識と呼んだもの」を、「あくまで消極的なものである」と述べるのはなぜか。次の中から適切でないものを一つ選べ。

a　私が純粋な意識と呼んだものは、時間を一瞬消滅させるだけの力しかもたないから。

b　私が純粋な意識と呼んだものは、弛緩状態に起こるものであるから。

c　私が純粋な意識と呼んだものは、真の緊張感をもつものではないから。

d　私が純粋な意識と呼んだものは、遅れをとりもどすことにすぎないから。

問五　傍線部5「特権的状態」とはどのような状態か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　現実を足場とし材料として、それを最大限に利用できる状態。

b　自己の性格や感覚さえも、自己確立のための足場として利用しうる状態。

c　意識が上に伸びあがって、時間の外に脱け出した状態。

d　意識が先走りしていない状態。

問六　傍線部6について、筆者の言う「認識者」とはどのような人か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　演技することができないので、倫理的なストイシズムに生きるしかない人。

b　現実から遊離してしまうので、過去と未来を材料にして生きるしかない人。

c　意識が先走りしてしまうので、諦観をもつに至らない人。

d　未来が見えてしまうので、現実と交わることのできない人。

問七　傍線部7について、筆者の言う「演戯者」に該当しないものを、次の中から一つ選べ。

a　現在が、過去・現在・未来という全体の象徴として自身に存在している人。

b　眼前に横たわっている未来に、文字どおり直面している人。

c　すべては見えないが、すべてが見えているふりをする人。

d　全体を眺めわたせるのに、限られた枠としての部分しか見ない人。

問八　傍線部8のように筆者が考える理由について、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　全体が見とおせるということは全体という観念が消失することであり、全体に変わって浮上した社会に部分は組み込まれてしまったから。

b　全体を見とおせるということは全体という観念が消失することであり、全体に依拠していた部分のもつ知識や智恵も自動的に消失したから。

c　全体を見とおせるということは全体という観念が消失することであり、全体に対置していた部分という観念も色あせざるを得なくなってしまったから。

d　全体を見とおせるということは全体という観念が消失することであり、全体がなければとどまっている部分というものが成立しないから。

問九　筆者の考えに合致しないものを、次の中から一つ選べ。

a　演戯とは、自分が自分と他人とを明確に見るためのものである。

b　人は、演戯することによって未来を強烈に味わうことができる。

c　演戯は、純粋な意識の真の緊張感を呼び起こすものである。

d　人は、演戯によって日常の現実を拒否する。

問十　二重傍線部Ⅰについて、「そのための行為」とは文脈上どのような行為か、わかりやすく述べよ。

問十一　二重傍線部Ⅱについて、「そういう二重性」とはどういうことか、わかりやすく述べよ。

問十二　波線部A～Eのひらがなを、字画正しい漢字に直せ。

二

次の文章は『松浦宮物語』の一節である。遣唐使として唐に渡った氏忠は、導かれるようにして皇帝の妹である華陽公主から琴の伝授を受け、二人は思いを寄せるようになる。八月と九月に、月明かりの中、氏忠は商山にて伝授を受けた後、華陽公主から今度は十月三日の月が沈むころに宮中の五鳳楼を訪ねるように言われる。これを読んで後の問に答えよ。

十月三日にもなりぬ。ア頼めたまひし、もしまことならむ時と思ふより、いとど心は騒ぎて、かの楼のもとに待ちゐたり。宮のうち、常よりも兵[1]いつくしく、わづらはしき気色なれど、わりなく紛れ入りたるに、げに月の入るほど、いたうも待たれず、出でおはしたるさまかたち、なかなかの月影よりげにめでたきを見るに、涙は先に立ちて、回廊の石の壇に、ただ時のほど、赤き扉をひきたてたれば、いと暗きに、[2]うちにほひたまへる御衣のにほひなどは、なべての香にしみたるにもあらず、ただ世の常ならずなつかしう、限りなき御けはひ、イ見ても飽かぬに、かたみにとりあへずこぼるる涙にくれつつ、何事も聞こえあへず。ウ思ひ入りたるさまいみじきに、女も現し[3]心失せはてて、「それも昔の契りと言ひながら、いとかうあるまじき心遣ひをしつるも、我が心の誤りにもあらず。『琴の声によりて、かならず身を滅ぼすゆゑともなるべし』と、仙人の教へしを思へば、[4]いまこの時なり。これを限り」と思ふとも、人の心のならひ、さてしもえやむまじきわざなれば、つひに乱れ出で来んとす。「まことに我をしのぶ心深く、あらぬ国にても忘エれたまふまじくは、こよひあだの命を失ひて、かならず後の世の契りを結ばむ」とのたまひて、[5]下裳の腰より、水晶の玉の手に入るほどなるを取り出でて、「つひに我が契りを忘れず、のたまふままの心ならば、この玉を身放たず持ちて、いみじき雨風の騒ぎ、波の下なりとも、つひに落とし失はで、我が国に帰りたまへ。聞けば日本に泊瀬寺といひて、観音おはすなり。かの寺にこの玉を持て参りて、三七日その法を行ひたまへ。さてのみなん、この世の人の謗りを負はで、かならずふたたびあひ見るべき」とのたまひて、まだ[m]更けぬほどに、隠ろへ入りたまひぬる名残言へばさらなり。袖を押し当てて、泣く泣くこの玉を握り持ちて、分け出づる心地、[6]はた商山を出でし暁に過ぎたり。

[7]さめぬ夜の夢の直路を[n]現にていつを限りの別れなるらむ

（『松浦宮物語』）

〈注〉○下裳　重ねの袋の時、下に付ける裳。　○泊瀬寺　奈良県桜井市初瀬にある長谷寺のこと。　○三七日　二十一日間。

問一　波線部ア～エのうち、主語が他の三つと異なるものを一つ選べ。

a　ア　b　イ　c　ウ　d　エ

問二　傍線部1「いつくしく」とはどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　顔立ちが端正で気品がある。

b　厳重でもものしい。

c　霊妙で神々しい。

d　数が多く騒ぎ立てている。

問三　傍線部2「うちにほひたまへる御衣のにほひなどは、なべての香にしみたるにもあらず」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　氏忠の衣にたきしめた香りは、暗闇の中でこの世のものとは思えないほど香っているということ。

b　華陽公主の衣にたきしめた香りは、ありきたりの香がたきしめられたものではないということ。

c　華陽公主の衣にたきしめた香りは、その辺りに漂う普通の香りが移ったものではないということ。

d　氏忠の衣にたきしめた香りは、その辺りに漂うあらゆる並の香りは寄せ付けないということ。

問四　傍線部3「現し心失せはてて」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　氏忠がとても悩んだ様子であるため、華陽公主は最も伝えたい本心を伝えられないということ。

b　氏忠がひどく思い詰めているので、華陽公主も平静な気持ちをすっかり失ってしまったということ。

c　氏忠がひどく考え込んでしまったので、華陽公主も現実を見失い深い悩みにとらわれたということ。

d　氏忠の自分への熱い想いが感じられて、華陽公主も夢のような気持ちがしたということ。

問五　傍線部4「いまこの時なり」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　前世からの宿縁とはいえ、氏忠を慕ってしまった華陽公主の身が滅びるのが、今この時だということ。

b　氏忠の過失により、二人が深い関係になったがために、華陽公主の身が滅びるのが、今この時だということ。

c　前世からの宿縁によって二人が出会い、そして二人の身が滅びるのが、今この時だということ。

d　仙人の教えを破ったため、その怒りにふれ、そのために華陽公主の身が滅びるのが、今この時だということ。

問六　傍線部5「下裳の腰より、水晶の玉の手に入るほどなるを取り出でて」とあるが、なぜそうしたのか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　水晶を持って華陽公主の故郷に戻り、日本の長谷寺で行われる修法をそこで行えば、また二人で会うことができるから。

b　水晶を持って日本に帰り長谷寺で修法を行うことが、もう一度幸せに二人で会える唯一の方法だから。

c　水晶を持って日本に帰り長谷寺で修法を行うことによってのみ、華陽公主は戒めを破った責めを負うことがなくなるから。

d　水晶を持って華陽公主の故郷に戻り、さらに日本に渡って長谷寺で修法を行うと、日本で再会することができるから。

問七　傍線部6「はた商山を出でし暁に過ぎたり」とあるが、どういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　商山を出てから暁になるまで、ずっと泣きながら歩き続けてきたということ。

b　華陽公主と別れて帰る苦しみは、商山を出発して暁まで歩いたあの苦しみと同じだということ。

c　以前華陽公主と別れて商山を出てきた暁の時のつらさよりも今はさらにつらいということ。

d　あまりの悲しみに泣きながら歩いていたら、気づけば商山を過ぎてしまっていたということ。

問八　傍線部7「さめぬ夜の夢の直路を現にていつを限りの別れなるらむ」の和歌の説明として正しくないものを次の中から一つ選べ。

a　「夢の直路」とは、夢の中で恋しい人の所へ通じる道のことである。

b　次にいつ逢うことができるか分からない不安を詠んだ歌である。

c　二人の逢瀬（おうせ）を覚めることのない夢の中での逢瀬にたとえている。

d　現実には逢えないが夢の中では会えることの安堵（あんど）が込められている。

問九　『松浦宮物語』は藤原定家の作品と考えられている。次のA～Eの作品を年代の古い順に並べたものとして正しいものを次の中から一つ選べ。

A　『源氏物語』　B　『伊勢物語』　C　『松浦宮物語』　D　『狭衣物語』　E　『石清水物語』

a　E→B→A→C→D　b　D→E→B→A→C

c　B→A→D→C→E　d　B→A→C→E→D

e　E→D→B→A→C

問十　破線部「なかなかかの月影よりげにめでたき」を現代語訳せよ。

問十一　二重傍線部X「昔の契り」、二重傍線部Y「後の世の契り」について、それぞれここではどういう意味か、説明せよ。

問十二　□で囲まれたm、nの漢字の読みを現代仮名遣で記せ。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。なお、設問の関係上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

雲未嘗有心也、而変幻起滅、若有司之者、是亦心也。[1]荘生曰、「吾之所待、又有所待而然者邪」。飄飄而来、分片而滅。以為有物、倏同太空。[2]以為無物、屯膏走月。余嘗登高巌。見其絮絮然[3]沾吾衣履也。少焉為美人、為蒼狗、為魚鱗鬣、似有魂魄精神者。[4]已[X]晴空捲紗、青紅爛然、又不知窈何之也。[5]其有帰邪、其無帰邪。古先生曰、「如夢幻泡影」。雲即影邪、[Y]非影邪。夫空潭黛碧、入而成色、雲之心能不有而巧於幻其有者也。

（袁宏道「雲影字解」）

〈注〉○荘生…戦国時代の思想家、荘子を指す。　○飄飄…風にひるがえる。　○倏…たちまち。急に。　○屯膏…恩恵を施すことがない。　○絮絮然…ひっきりなしである様。　○廓…くつ。　○鱢…魚のヒレ。　○捲紗…うす絹をまきあげたように空が晴れる。　○瀾然…まだらになった様。　○窈…うす暗く、ぼんやりしている。　○夢幻泡影…はかないもの。『金剛般若経』に見える語。　○空潭黛碧…水面に何もない、青緑の淵。

問一　傍線部1「荘生」の主張に合致するものとして、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　待ち望むという私の行為があってこそ、私を待ち望む人の心が理解できる。

b　自分が寄りかかっているものも、また寄りかかる他の存在があって、そのように存在する。

c　自ら期待するものがあってこそ、世の中に期待されるものが存在することを理解する。

d　自己の依存するものは次第に変化し、さらには自己との関係性もまた自然と変化する。

問二　傍線部2「以為無物、屯膏走月」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　存在がないかと思えば、月を隠したりする。

b　実体がないので、歳月の経過にも関係ない。

c　物として価値がなく、月々の利益もない。

d　無用のものであり、月光ほどの役にも立たない。

問三　傍線部3「沾吾衣屨也」が表す内容として、もっとも適切な説明を次の中から一つ選べ。

a　雲は雨となって衣服やくつを濡らすように、存在そのものが変幻自在であること。

b　雲は実体がないように思われるが、衣服やくつを濡らすという存在感を有すること。

c　高いところに登ったことで衣服やくつが濡れてしまったように、世のすべての事には因果関係があること。

d　雲が衣服やくつを濡らすような存在へと変化したことにも、心の働きが関係していること。

問四　傍線部4「青紅」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　青い水の色と紅い花の色。

b　天空の抜けるような青と輝く太陽の紅。

c　青白い雲の色と暖かく赤みを帯びた日の光の色。

d　大空の青色と夕焼けの紅色。

問五　傍線部5「入而成色」の意味として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

a　淵に溶け込んでしまう。

b　淵の水の色と同じ色になる。

c　淵の水面にその姿が写っている。

d　淵の水との境目がわからなくなる。

問六　文中の空欄X・Yに補充する語として、もっとも適切なものを次の中から一つ選べ。

X　a　而　b　後　c　也　d　矣

Y　a　況　b　豈　c　寧　d　抑

問七　波線部A「似有魂魄精神者」について、なぜこのようにいえるのか。その理由を説明せよ。

問八　波線部B「不知窈何之也」を全てひらがなで書き下し文にせよ。

問九　波線部C「雲之心能不有而巧於幻其有者也」を現代語訳せよ。